

国際通貨基金

クリスティーヌ・ラガルド専務理事
慶應義塾大学での特別講演会

東京

2012 年 7 月 7 日 (金)

議事録

柏木教授： ご来場の皆さま、本日は国際通貨基金（IMF）専務理事の特別講演会にお越しいただき、ありがとうございます。IMF 代表団の皆さまをこの慶応義塾の三田キャンパスで心より歓迎いたします。

また、雨天にもかかわらず、今朝は多くの学生の皆さんが集ってくれました。本日の講演会を楽しんでいただきたいと思います。また皆さまにお願いがありますが、この講演会では、ビデオ撮影と写真撮影が行われます。ご覧の通り多数のカメラマンが控えていますので、この点についてご了承ください。

それでは、清家塾長に専務理事への歓迎のご挨拶をお願いいたします。
清家塾長、こちらへどうぞ。（拍手）

清家塾長： 皆さま、おはようございます。本日はご来場いただき、心より御礼申し上げます。IMF 専務理事であるクリスティーヌ・ラガルド氏をお迎えするという名誉な機会をいただき、光栄に存じます。

まず、慶應義塾大学を代表しまして、お忙しいスケジュールの中、本塾にお越しいただき、学生に講演をしてくださるラガルド専務理事に心より感謝いたします。

今年は、日本と IMF の歴史にとり特別な年です。10 月に、IMF と世

界銀行が 48 年の歳月を経て再び日本で年次総会を開催します。この重要な時に、IMF の最高責任者であるラガルド氏をお迎えすることができ、誠に喜ばしいことでございます。

フランスのパリで生まれたラガルド氏は、高等教育をフランスで受けられた後、アメリカへ留学し、メリーランド州ベセスダにあるホルトン・アームズ・スクールで学ばれました。パリ第 10 大学ロースクール卒業後、エクス＝アン＝プロヴァンス政治学院で修士号を取得され、その後、パリ弁護士資格を取得、国際法律事務所であるベーカー&マッケンジーで輝かしいキャリアを積み重ねました。

2005 年 6 月、ラガルド氏は、対外貿易担当相としてフランス政府に入閣しました。その 2 年後、G7 最初の女性経済・財政相に就任しました。また、欧州連合（EU）加盟国の経済・財務相による経済・財務相理事会（ECOFIN）の議長、その後 G20 の議長を務めました。

女性初の IMF 専務理事に就任したのは、ちょうど 1 年前の 2011 年 7 月のことです。ラガルド氏は、国際経済政策の鍵を握る人物のお一人でいらっしゃいます。私自身これまで、ダボスで開催された世界経済フォーラムなどで、ラガルド氏の講演を数回拝聴する機会に恵まれましたが、その度に常に明瞭で、そして非常にバランスのとれた見解にいつも感銘を受けました。

本日、ラガルド専務理事は、学生の皆さんに講演の後に行われるディスカッションに積極的に参加するようおっしゃっています。これは、本日の聴衆、特に若い人々にとってまたとない貴重な機会です。活発で有意義なディスカッションが行われることを期待しています。

それでは、早速始めたいと思います。ラガルド IMF 専務理事を心を込めてお迎えいたしましょう。（拍手）

ラガルド氏： おはようございます。（笑い拍手）、ボンジュール、ありがとうございます。そして、おはようございます。本日は、この講演会に参加してくださりありがとうございます。今日は土曜日で講義がなく、皆さんは家でくつろいだり、または勉強をしたかったりしたのではないのでしょうか。皆さんにお会いでき嬉しく思っています。

暖かく迎えてくださった清家塾長に心より御礼申し上げます。この後のディスカッションで司会を務めてくださる柏木教授にも感謝いたします。この講演会に参加してくださった教授の皆さまも、自宅でくつろぎたかったのではないかと思います。（笑い）

そして、ここにいらっしゃる嘉治教授にも特に御礼申し上げます。私と嘉治教授は昨晚夕食を共にしましたが、本日のために秘密兵器を仕入れることができました。私は皆さんや慶應義塾大学の精神について嘉治教授に質問し、いろいろなことを知ることができました。

嘉治教授は、皆さんが恥ずかしがったり、堅苦しいと思ったりすることなく積極的にディベートに参加し、質問すると断言してくださいました。ですから、皆さんが、教授が約束してくれたように、私の期待に応えてくださることを楽しみにしています。私のお話が終わりましたら、皆さんが思いついたことを何でも質問してください。経済学のことでも、アメリカのこと、フランス、ヨーロッパ、個人的なこと、仕事のこと。心に浮かんだことを何でも質問してください。くだらない質問などありません。間が抜けた返答はあるかもしれませんが、くだらない質問というものは存在しません。質問することは常に大事なことですし、歓迎します。よろしいですか。これが、今回のルールです。

これから皆さんに少しお話をしますが、講義をするつもりはありません。これから話すことは、経済に関する IMF の信条についてではありません。私がお話したいのは、変革する世界についてであり、このことについて、私の今までの人生の歩みと関連付けてお話します。私の話を面白いと感じるかもしれません。あるいは、時代が大きく変化した現代では、奇妙に思うかもしれません。皆さんは他の人の人生の歩みから何かを学び、自分の人生をどのように生きていくか決めることができます。ですから、経済学に関する仰々しい講義は期待しないでください。今日の講演内容はそれとは異なります。

何故、慶應義塾大学の塾長からのご招待をお受けしたか、皆さんはその理由に関心があるかもしれません。慶應義塾大学の理念や教育へのアプローチについて、少しですが知ることができました。貴校では、第一に多様性、第二に国際主義が重んじられており、とても心強く感じられました。そして、これこそがご招待をお受けした理由であり、本日みなさんにお話している内容を考えている時に、私の頭の中にあったものでした。

また、慶應義塾大学創設者の福澤諭吉が掲げた貴校のビジョンに感銘を受けました。福澤諭吉は、慶應義塾大学を「気品と智徳の規範」とし、「社会の先導者にふさわしい学生を育成する」ことを目指していました。そして、そのビジョンは正しかったのです。慶應義塾大学出身の日本の総理大臣、国会議員、日本企業の最高経営責任者の数を見れば、未来の指導者を育成するという福澤諭吉の望みは正しかったのであり、その方針に見合った結果を生み出しています。

私も多様性と国際主義の原則を特に重んじています。そして、この会場には、日本人以外の学生もいらっしゃいます。フランス出身の学生もいらっしゃると聞きうれしく思います。多様性については、後ほどお話ししたいと思います。

それでは、変革、及び変革が皆さんの人生の歩みにどのように関係しているのかというテーマについてお話をする前に、私たちは急激に変化し

ている世界に住んでいるということ、そしてその世界はこれまでに変化を遂げ、変化し、これからも変化し続けるということからお話したいと思います。物事があまりにも速く変化するので、私たちはめまいに襲われたような感覚に陥ることがよくあります。しかし、人生とは変化であり、私たちは常に変化を経験しています。

ここでお伝えしたいのは、最も根本的な変化は、コミュニケーションの加速、コンペティション（競争）の拡大、そしてコラボレーション（協働）が組み合わされた時に生じることが多いということです。ここでは、このコミュニケーション、コンペティション、コラボレーションを「三つのC」と呼ぶことにします。

これまでの人生を振り返りますと、この「三つのC」の組み合わせを見出すことができると思います。

15世紀のグーテンベルクの時代に遡ってみると、印刷業の誕生によりコミュニケーションが広まり、多くの人々の人生に変化をもたらしました。これがルネッサンス時代を生み出し、この時代にコミュニケーション、コンペティション、そしてコラボレーションが加速したことは明らかです。以降、人々の生活は大きく変わりました。

何世紀かを経て20世紀の終わりを見ると、グーテンベルクの印刷技術と同じく、世界に根本的な変革をもたらした発明がありました。それは何

だと思いませんか。20 世紀の終わりにコミュニケーションの加速がありました。皆さんがいつも使っているものです。インターネットですね。インターネットは、グーテンベルクの印刷技術と同じように、コミュニケーションを著しく加速し、人々を結びつけ、皆さんの生活を大きく変えました。

皆さんの生活は、私の学生時代とは違います。皆さんは「つながって」います。私が 20 歳の頃にはそのようなつながりはありませんでした。私は手紙を書いていた。私が 17 歳で初めてアメリカで 1 年間過ごした時、1 カ月に何通か手紙を受け取りました。当時手紙は、パリからワシントンまで郵送で 5 日かかっていた。

今では信じられませんね。皆さんはインターネットを利用します。電子メールを書き、Twitter でつぶやき、Facebook などのソーシャルメディアを利用しています。インスタント・コミュニケーションです。皆さんは、互いに関係し、つながっています。これにより、皆さんの生活は大きく変わりました。皆さんは遠くにいる人たちにまでつながることができるようになり、瞬時にコミュニケーションをとることができるようになりました。そして、これは 15 世紀の印刷技術の発明と同じように、大きな変化をもたらしたと私は考えています。

それでは、大きな変革の他の例を考えてみましょう。皆さんの大学が

設立された1858年には、何が起こったのでしょうか。世界の大半の先進国では、産業革命とこれに伴った鉄道と交通手段が広まり、人々の移動が加速しました。これは、実際のコミュニケーションという行為に大きく関係したものではありませんでしたが、人々を一段と結びつけました。ここでもまた、コミュニケーション、コンペティション、コラボレーションという「三つのC」を見て取ることができます。この変革が人々の生活に大きな変化をもたらしました。

つながりとは素晴らしいものです。つながることで皆さんは互いに結びつきます。留学生の皆さんは、故郷とコミュニケーションを取ることができます。FaceTime を使えば、故郷にいるようにコミュニケーションをとることができます。ご両親、兄弟、友人に会えます。情報にアクセスし、皆さんの身近にはないアイデアにアクセスする機会があります。ただし、同時にこれは脅威ももたらすのではないのでしょうか。

たとえば、シンガポールからの巨額の資金の出し入れなど、様々なことが一瞬で、時には深く考えることもなく行うことができます。また、ロンドンの家電量販店が倒産すると、アジア全体の生産スケジュールが中断することになります。このように脅威ももたらし得るのです。国外、遥か遠くで起こっている金融危機が、実際には日本や世界のどこかで失業をもたらすという影響をおよぼす可能性があるのです。

したがって、私たちは、加速したコミュニケーション、コンペティション、コラボレーションの良い点と悪い点について良く考える必要があります。これは、良いことも悪いことももたらします。皆さんの教育、皆さんがどのように知識を正しく理解し、どのように物事を選別し、処理するかが非常に重要になってきます。世の中に溢れている情報に対して、皆さんが思慮深く、賢明に、理知的にアクセスする上で、慶應義塾大学が行う教育が欠かせないのはこうした理由によります。

そして、これは皆さんが変革の主体となる上でも役立ちます。何故これがこれほど重要なことでしょうか？ それは、完璧なものは存在せず、世界はあらゆる人の人生を満たし、満足させるほど進化しておらず、変化していないためです。現在、約7,500万人の若者、皆さんと同じ年頃か何歳か上の若者たちが仕事を探しています。彼らには仕事がありません。雇用へのアクセスがありません。雇用市場へのアクセスに拒否されているのです。

この事実は、各国政策当局が細心の注意を払うべきことのひとつであるのは明らかです。そしてIMFは、強固で持続可能、そしてバランスのとれた成長だけではなく、包括的かつ十分な雇用を伴う成長の確保に政策担当者が力を注ぐことを強く希望しています。

皆さんはこの問題に関して何かできるのでしょうか。答えはイエスです。

優れた大学で優れた教授から教育を受け、豊富な情報にアクセスし、会えるわけではないと思っていた人々と会うことができ、新しい考え方を生み出す能力と頭脳を備えた皆さんは、より良い世界を築くために貢献することができ、現在、そして今後の世界の変化のあり方に影響を与えることができるのです。

そして、こうした変化には、様々な考え方、よりグローバルな考え方が必要だということをお伝えします。なぜならば、問題はグローバルであり、それに伴う責任もグローバルだからです。

IMF が取り組みの強化を図っている分野の一つに、ある国で決定される政策の波及効果（スピルオーバー効果）があります。たとえば、ある金融政策が採択されると、その政策を決定した国で効果を発揮しますが、その国以外の国や地域にも影響を及ぼすことが多分にあります。そして、その影響を検証するのが IMF の責務です。

皆さんはそこに何を見出すことができますか。相互の結びつき。国境を越えた変化の影響。共同責任。そして、グローバルな問題ゆえのグローバルなアプローチを見て取ることができます。

皆さんは、これに対しどのような準備をすることができるでしょうか。皆さんは、これからの人生を自分で選択することになります。私もこれまで自分の人生を自ら決めてきましたが、確かなことは、グローバルな問題、

グローバルな課題、グローバルな責任といった課題により適切に対処するための素養を、人生の極めて早い段階で豊かな多様性の中に身を置くことで培うことができたことです。

ここで言う豊かな多様性とは何でしょうか。それは、他の人々に見る様々な違いを尊重し、寛大に受け入れることです。なぜなら、私たちの肌の色は、皆同じではありません。髪の色も、皆同じではありません。私たちは全く同じ文化や同じ経歴を持っているわけではなく、ましてや同じ社会の層の出身ではありません。私たち一人ひとりが、それぞれに豊かさをもたらします。皆さんのうち何人がフランス語を話すことができるのか分かりませんが、ポール・ヴァレリーという美しい詩を書く詩人がいました。ヴァレリーは、第二次世界大戦後、IMF や世界銀行といった国際機関が設立され、違いや多様性が尊ばれた時代に、次のような魅力的な詩を書きました。“Mettons en commun ce que nous avons de meilleur et enrichissons-nous de nos differences mutuelles.”
とても素敵な響きですね。響きだけでなく、もちろん、意味があります。

あまりうまく翻訳できませんが、これは「互いに持ち合わせている最高のものを共有し、私たちの違いで私たちそのものを豊かにしよう」という意味です。私にとって、この詩は多様性の本質を表すものであり、他の人々が示す違いが、皆さん自らをどのように豊かにできるのかを示してい

と言えます。したがって、変革が進む過程において、私は皆さんに、あえて多様であれ、そしてあえて他と異なる人間たれ、とお伝えしたいと思います。これにより、皆さんは自分自身について多くを知るようになるでしょう。

多様性を巡る私の初めての経験は、17歳の時のことでした。私は故郷を離れ、家族や友人と離れました。自分の母国語、歴史、文化と離れました。海外に行ったのです。当時、私はアメリカン・フィールド・サービスの奨学生であり、アメリカの家族のなかで暮らし、アメリカの高校に通学しました。私が当時知っていたアメリカの文明や文化は、アメリカに来る前に何度も読んだアレクシ・ド・トクヴィルの本で学んだものであり、実際アメリカに来て私は途方にくれました。実際、シャワーを浴びたいと説明するのに数日かかりました。「シャワー」という単語をうまく発音できず、ホストファミリーは私が何を話しているのか理解できませんでした。

これこそが多様性でした。アメリカン・フィールド・サービスの素晴らしい点は、世界の様々な国から学生が集まり、海外で生活し、同じ体験を共有できることです。ワシントン地区で、学校に通い、後に私がホストファミリーを理解するにつれて私のことを理解してくれるようになり、今でも深く敬愛している家族をアメリカに得ることができたわけではありませんでした。私は、世界中から来た50人の学生のグループと一緒にいました。

ペルー、日本、トルコ、デンマークをはじめ、世界の様々な国の出身の友人ができ、経験を分かち合うことができました。

そして、私たちは自分たちの多様性、すなわち、肌の色、髪の色、問題や社会をどのように理解し、どのように立ち向かうか、欲しいものをどのように相手に説明するのか、といったことが私たちを一つにしたと理解するに至りました。私たちには、どれほど多くの共通点があるかを理解しました。私たちの違いをどれほど重んじるべきか、そして違いにより我々は離れ離れになるのではなく、むしろ一層絆を強めるべきだということを理解しました。これが、私の多様性を巡る最初の経験でした。

次に簡単にですが、協調の精神について触れたいと思います。

協調の精神については、ここ日本ではおそらく私が長々と説明する必要がないでしょう。というのは、私が思うに、歴史の中の多くの場面で、日本人はこの協調の精神を行動で示してきたからです。そして、2011年3月のあの恐ろしい大地震と津波の後、日本人は、結束を強め協力して取り組み、逆境にあっても強くあるという協調の精神こそ、人々に共通した特徴であり、復興に携わる全ての人々を強くするものだということを世界に示しました。これは、世界中の人々を驚嘆させました。

協調の精神は、人生で数多く経験することであり、皆さんのこれからの人生で経験していただきたいものです。

私は約 20 年間、国際法律事務所のパートナーとして仕事をしていました。そして、この経験により私の多様性に対する感覚が再び高まることとなりました。この国際法律事務所は、30 カ国に 60 に及ぶオフィスを構えており、600 人のパートナーが在籍していました。とてつもなく巨大なエゴの集まりだと確信を持って言えます。その巨大なエゴの集まりが協調の精神の下に団結し、互いに責任を負わなければなりませんでした。誰かの過ちは皆の過ち、誰かの成功は皆の成功であり、一人の大きなエゴが 600 人の協調を壊すことがないように結束する必要がありました。

しかし、この協調の精神こそ、皆さんの生活で、そして人生を歩んでいく上で是非尊重していただきたいものだと思います。協調の精神は、厳しいものです。荒野でひとりぼっちのカウボーイでいるよりもずっと難しいものですが、その一方で実り多きものです。繰り返しますが、協調の精神は、皆さん自身について、皆さんの対応能力について、そして他の人に対し寛大であることについて、教えてくれます。歩み寄る精神を与えてくれるものであり、皆さんの目的、そして皆さん自身を超える何かを見出す精神を与えてくれるでしょう。協調の精神は、先にお話しした、多様性の原則やその豊かさと組み合わせると、極めて重要なものとなると私は考えています。

この講演を締めくくり、皆さんからの質問を受ける前に、最後にもう

一点だけお話をさせてください。

それは、他と違っていることを恐れないことです。これは、慶應義塾大学が尊重している点でもあると確信しています。皆さんは、同じように考える必要はありません。IMF では、様々な考えをもつことを奨励しています。誰もが同じように考える必要はありません。IMF は、他の多く組織、私が知っているどの民間部門の組織とも異なり、自分自身を見つめ、十分に寛容となり様々な考え方を受け入れ、反対意見を受け入れ、そして反対意見を奨励するというアプローチを取り入れています。これは極めて重要なことです。

私が最初に述べた相互の結びつきのお話とつながるのは、この点です。

今日みなさんは、私が学生だった頃、あるいは皆さんの教授が学生だった頃と比べ、他の人とは違った考え方を持つことが容易な環境にあると言えましょう。当時は、違う考え方に触れたいと思った時、あるいは新しい分析方法が必要になった時、沢山のリサーチをしなければなりませんでした。結論に至るまでに図書館に何時間も籠らなければなりませんでした。

今日、指先ひとつで豊かな情報を活用することができます。遥かに容易なプロセスです。違う考え方をし、異なる分析結果、異なる考え方を受け入れる勇気さえあれば、皆さんの人生は実に豊かになります。就職の

面接で他の人と同じ考え方をしても、教授や将来の雇用主の記憶に残らないでしょう。他の人と違うからこそ、皆さんは注目され、覚えてもらえるのです。

違いを恐れることなく、指先一つで入手できる豊富な情報や知識から結論を導き出すには、繰り返しになりますが、頭脳が鍛えられていなければなりません。皆さんの頭脳は、何が必要で何が不要なのか、公平さや、正義、均衡があるのかを判断できなければなりません。ですから、皆さんが実際に多様性、協調、そして、他の人とは違う存在である能力と勇気を身につけるために、教育が重要となってくるのです。

ここで、再びコミュニケーション、コンペティション、コラボレーションという三つのCが関係してきます。多様性、協調、異なる存在であるというパワーが、コミュニケーション、コンペティション、コラボレーションの力をさらに増すことになります。

それでは、最後に皆さんにアドバイスを一つ、いえ、二つ贈りたいと思います。

一つ目は、以前アスリートだった経験からのものですが、体と頭脳の折り合いをうまくつけてください。皆さんの頭脳は非常に活発に動いています。今後も皆さんの頭脳は、フルに活用され、たくさんの知識、理論、思考で埋め尽くされるでしょう。しかし同時に、皆さんの体が満足できる

状態にあるようにしてください。私たちの体はひとつしかないのですから、常に好調を維持し、活発な脳の動きと身体のバランスが取れているようにしてください。体が発する声に耳を傾け、どんなスポーツでも良いのでスポーツをして、正しく呼吸し、体が喜んでいるかをチェックしてください。これが一番目のアドバイスです。

二番目のアドバイスは、常に何が起こっても楽観的であるということです。前にも述べましたが、人生とは変化です。変化そのものが人生です。時には、変化する現実とうまく折り合えないことがあります。圧倒され、めまいを起こすことがあります。我々が存在する前から変化は存在し、私たちが死んだ後も変化は続くのです。しかし、私たちはこうした変化に加わり、また変化に対して楽観的でなければなりません。たとえば、日本の優れた企業がロボット工学を日本の得意分野に変え、歩きながら音楽を聴くスタイルはここ日本で発明され、そして今はどこにでもあるフラット画面は日本で誕生しました。そうした変化が生じるのは、人々、人類、男性と女性が、技術革新に時間を注ぐ価値があると考え、未来に対して楽観的であって良いと考えたからなのです。

第一に、突き詰めれば、悲観論者と楽観論者の間には大した違いはないのです。どちらも共に思い違いをしていますから。（笑い）でも、楽観論者の方が遥かに幸せです。（笑い）ですから、皆さんにはこうした変化

に対して楽観的であってほしいと思います。

ご清聴ありがとうございました。（拍手）

柏木教授： どうもありがとうございました。

ラガルド氏： どういたしまして。

柏木教授： ラガルドさん、中身の濃い、学生にとって良い刺激になる、示唆に富んだスピーチ、私のボキャブラリが十分ではないので何と表現してよいかわからないのですが、とにかく、とても素晴らしいスピーチをありがとうございました。また、多様性、異なる考えを持つこと、そして楽観的であることの重要性を示してくださり、ありがとうございました。ご覧の通り、私は今日ネクタイをしないでここに来てしまいました。これはクールビズなのですが、塾長はじめ他の教授は皆ネクタイをしています。（笑い）どうなることかと心配しました。ラガルドさんがおっしゃったように、異なる考え方というのはとてもよいことです。

ラガルド氏： それに、人と異なる服装も。（笑い）

柏木教授： 異なる服装、その通りですね。私もこの異なる思考について学びました。私も慶應で教育を受けました。また、日本を代表して、IMF でエコノミスト、そして理事として10年間過ごし、多様性と異なる思考を満喫する機会に恵まれました。

さて、先ほど専務理事が繰り返しおっしゃったように、専務理事は

本日、皆さんとの意見交換の機会を持つことを申し出ていただきました。ラガード氏は学生の皆さんからの質問を楽しみにされています。この機会を作ってください、感謝しております。それでは、早速、質疑応答に入りますが、いくつかルールがあります。

まず、質問がある人は挙手をしてください。私が無作為に指名します。指名されたら立ってください。マイクが渡されます。氏名、学部などの自己紹介をしてから、簡潔に、的確に質問をしてください。（笑い）演説をはじめないでください。的確な質問をお願いします。そして、できるだけ質問は英語でするようにしてください。皆さんにとって良い機会です。それでも、皆さんの中には英語が得意でない人がいるのも承知しています。その場合は、日本語で質問しても構いませんが、ヘッドフォンを装着するのに少々時間が必要ですから、日本語で質問する場合は、初めにその旨を言い添えてください。以上が質疑応答のルールです。それでは、質問を受け付けます。いくつか質問が出るでしょうか。

ラガード氏： 女子学生と男子学生の両方指名してください。

柏木教授： その通りですね、多様性です。（笑い）わかりました。それでは、メガネをかけた男性から始めましょう。二列目の方。

質問者： ありがとうございます。経済学部（聞き取り不能）学生の（聞き取り不能）と申します。私は来月から（聞き取り不能）を始めま

すが、ここに参加でき光栄です。私の夢は、IMF でエコノミストになることです。私の質問は・・・

ラガルド氏： それで、あなたは今日応募するのですか？（笑い）

質問者： そうできれば・・・。私の質問は、国際通貨制度と地域の通貨同盟についてです。国際通貨制度の安定性の促進において、地域レベルの通貨同盟はどのような役割を果たすことができるでしょうか。どの地域通貨同盟が重要な役割を果たそうとしていると考えていますか。こうした地域レベルの取極において、IMF はどのような役割を果たすことができますか。 よろしくお願いします。

柏木教授： わかりました。時間を節約するために、いくつか質問を受けつけてから、専務理事に回答していただくようにします。その他にグローバルな問題について質問したい方は。

それでは、一列目の女性の方。

質問者： 素晴らしいスピーチをありがとうございました。同じく経済学部の（聞き取り不能）と申します。私も IMF について質問があります。最近、IMF はユーロ圏諸国への金融支援に着手しました。IMF 財源を増額するように IMF から最近要請がありましたが、それはユーロ圏諸国への追加支援の準備のためだと私は理解しています。しかし、IMF の財源がユーロ圏危機の解決にどうして必要なのか、私は少し混乱しています。IMF の

国際的な最後の貸し手としての重要な役割は理解できますが、欧州中央銀行は資金、すなわちユーロを無制限に提供することでユーロ圏の国を容易に救済できます。ユーロ圏危機の対処に何故 IMF の財源が必要なのですか。

柏木教授： わかりました。ユーロ圏危機における IMF の役割についてですね。他にありますか。二列目の外国人学生の方。

質問者： ありがとうございます。バングラデシュ出身の（聞き取り不能）です。私は、バングラデシュ歳入庁に勤務しており、現在は慶應の商学研究科で学んでいます。異なる考え方についてお話されましたが、私は、柏木教授、嘉治教授、吉野教授の講義を受講しており、どの教授も同じことを教えてくださっています。ところで、バングラデシュは、最近 IMF から巨額の融資を受けましたが、一定のコンディショナリティーではありませんでした。私の質問は、IMF のコンディショナリティー（聞き取り不能）、安定性、構造調整プログラムは、低所得国（LIC）で政党を増加させますか。ラガルド専務理事は、IMF の法律に関するこの種の厳しい批判についてどう見えていますか。よろしくお願いします。

柏木教授： わかりました。手強い質問が三つ出ました。

ラガルド氏： 皆さん、準備万端ですね。（笑い）それでは、IMF が果たす役割から始めます。地域取極と、IMF と地域取極との関係ですね。それでは、二つの地域取極について述べたいと思います。一つは、ご存知

の通りチェンマイ・イニシアティブです。最近 ASEAN+3 がその資金規模を倍増することに合意しました。

もう一つは、皆さんもご存知の地域取極である、欧州連合のユーロ圏での地域取極で、質問にも関係していますね。

この二つの取極は、明らかに異なるものです。前者は、必要性が生じる前に導入されました。チェンマイ・イニシアティブは、予防的な性質のものであり、また欧州安定メカニズムの下で利用可能なほどの資金がありません。ただし、チェンマイ・イニシアティブは今のところ発動されていません。その必要性がないからです。この取極は予防的で問題が起こる前に導入されました。すなわち、経済危機から必要に迫られてではなく、アジア危機の後に設立されました。一定の水準以上において、チェンマイ・イニシアティブと IMF は明確に協調しています。

予防目的で、一定の水準以下では、この地域取極は IMF が関与してなくても機能することが可能です。一定の水準以上では IMF が関与することになりますが、実際これが、チェンマイ・イニシアティブが機能するための重要な条件のひとつとみなされています。したがって、この地域取極と IMF の間には積極的な役割と協調関係が存在していると言えるでしょう。

IMF には、60 年以上に渡る危機対処の歴史があります。IMF は、危機管理だけを行ってきたわけではなく、他のことも多く行ってきました。

しかし、IMF の危機管理に関する専門的知識は、チェンマイ・イニシアティブと比較して充実していることは明らかです。さらに、コンディショナリティーの草案を起草する専門技術を活かし、コンディショナリティーが確実に実践されるようにし、我々が考える、その国の状況を改善する上で最適となるよう政策ミックスを調整することは、IMF を賢く利用する方法だと私は思います。

一方、欧州安定メカニズムはまだ発効していませんが、欧州金融安定ファシリティー（EFSF）を引き継ぐ予定です。これは、危機にあるユーロ圏が危機管理メカニズムとバックネットのメカニズムを必要としていたことから構築されたものです。さらにもう一度 EFSF がどのように利用されてきたかを見てみると、あるいはその前の、ユーロ圏加盟国とたとえばギリシャとの二国間融資、あるいはアイルランド向けプログラム、あるいはポルトガル向けプログラムも、欧州の国々、特に欧州委員会、欧州中央銀行、そして IMF が密に協力しまとめあげたものだと分かるでしょう。IMF は、融資総額のおよそ 3 分の 1 を提供したのみならず、プログラムの作成や危機に陥っている国に対する政策助言などで、蓄積した経験を活かしてきました。

したがって、こうした制度の創設の背景には、二つ異なるメカニズム、二つの異なる起源があるわけです。ただし、どちらの場合も、IMF の専門

知識を活用し、IMF との強固な協力体制があるわけです。

さて、ここで質問の中で指摘された点ですが、IMF は最後の貸し手ではありません。IMF は貸し手ですが、最後の貸し手ではないのです。最後の貸し手となることが、IMF の創設者であるジョン・メイナード・ケインズ卿の夢だったのかもしれませんが、現在は異なります。IMF のリソースは、IMF の全ての加盟国の潜在的なニーズに応えるためにあります。

現在、IMF の加盟国は 188 カ国です。全世界のほとんどの国が加盟しています。IMF は、加盟国のニーズが何であれ、それに対応できなければなりません。これまで IMF は、第二次世界大戦以後、欧州を支援しました。その後、様々な国が国際収支の問題に直面しました。そして IMF は往々にしてこうした状況にある加盟国に対し、手を貸してきました。IMF は、ラテンアメリカが困難な時代を経験したときに支援しました。その後、IMF はアジア危機に対処しました。アジア諸国も、同様に支援を必要としていました。そして、今、我々は再び欧州と共にあります。

IMF は次にどこに行くのでしょうか。私にはわかりません。しかし、また新たな目的地が見えてくることでしょう。IMF が追加財源を必要としている理由は、経済危機の規模と懸念されている国々の経済状態から、IMF が関与すべき水準が高まってきているからです。欧州やユーロ圏だけではありません。危機の震源地はアメリカからユーロ圏に移動しましたが、

その他の多くの国々が危機の副次的影響の犠牲になる可能性があります。

そのために追加の財源が必要だったと私は考えており、それにより IMF は 4,560 億ドルの財源を新たに用意することができました。その結果 IMF は、他の加盟国に 1 兆ドル規模を支援できる能力を備えることになりました。

3 番目の質問は、コンディショナリティーですね。コンディショナリティーは、IMF の設立当時は存在しませんでした。時間が経つにつれて次第に要件のひとつとなりました。そして、コンディショナリティーの変化は、融資額の増加や、融資期間が数年単位ではなく、長くなっていること、そして、貸し手が求めるリスク軽減政策と関係があります。外貨準備高が減少し、国際収支の問題に陥っている国にとって、融資はとても有効でしょう。しかし、被融資国に取り組んでいる何百というエコノミストという存在により一段と有効となるのではないのでしょうか。彼らの考えるところの、国を躍進させ、国を一層強固にするための、例えば、初期の段階に集中して行う財政健全化プログラムや、製品やサービス市場の開放を進め、柔軟性を高めるための構造改革などが役に立つのではないのでしょうか。

こうしてコンディショナリティーという原則が生まれ、これが時間と共に有益であることが判明しました。私は、IMF プログラムが行われているロシアを訪問しました。ロシアの指導者は、プログラムが実施された当

時は非常に腹立たしく思っていたと明かしてくれました。実際これは、よくあることです。あれをしてください、これにもっと注意してください、あの歳出政策を厳格化してください、これは成功から程遠く赤字と債務が蓄積するだけですよと言われたら、誰も良い気分にはならないでしょう。率直に言えば、融資を受けた国がどん底を経験した後、より安全な旅ができていなければ、コンディショナリティーはそれほど悪くなかったのだと後から考えるようになるわけです。私はこれまで1年間で、IMFが果たした役割としてそのようなコメントを何度も聞きました。

もう一つ付け加えるならば、IMFは次に挙げる二つのことについて、これまで以上に注意を払い、耳を傾けようと考えています。一つは、市民社会とのより有益な対話です。近年、IMFは市民社会への働きかけに真剣に取り組んでいます。10月に東京で開催される年次総会では、これを見ていただくことができるでしょう。労働組合の幹部や非政府組織に働きかけ、そうした組織の主張に耳を傾け、立場や不満を理解し、そのことを念頭に各種IMF支援プログラム構築のサポートに取り組んでいます。

二つ目に、IMFは、社会であまり特権に恵まれていない層をより重視しています。IMFの多くのプログラムがソーシャル・セイフティ・ネットを推奨しているのはそのためです。補助金の打ち切りをすすめる場合、特に石油製品の補助金の場合、IMFはとても慎重に検討します。これにより

あまり特権に恵まれない人々が苦しむことになるので、事前に十分に計画して、彼らが代わりの支援を受けられるようにしなければなりません。

柏木教授： わかりました。ありがとうございました。それでは、他の質問を受け付けます。日本経済、日本の役割、私生活についての質問などはどうでしょうか。1 列目の男性の方。

質問者： はい。 *Merci beaucoup.*

ラガルド氏： 素晴らしい。

質問者： (フランス語を話す) *Oui?*

ラガルド氏： *Bon.*

質問者： 素晴らしいスピーチをしていただき、ありがとうございます。既におっしゃっているように、現在、自国のことだけではなく、若者の問題、特に例えばギリシャの若年層の失業についても考える必要があります。そして、もちろん、金融をめぐる問題も解決していかなければなりません。その過程で、増税などで若者がかなり打撃を受けます。若年層の失業問題を解決するうえで、何か解決策やアイデアをお持ちですか。専務理事の見解をお聞かせください。

ラガルド氏： わかりました。

柏木教授： 他に質問は。白い紙を手にした女性の方。

質問者： 専務理事に質問する機会を頂き光荣です。経済学部の（聞

き取り不能) と申します。多様性のある組織で初の女性専務理事となられたラガードさんのキャリアについてお聞きしたいと思います。女性の指導者として直面した最大の障害は何ですか。そしてどのように克服しましたか。 *Merci beaucoup.*

柏木教授： わかりました。他に質問は。黒いシャツを着ている男性の方。

質問者： *Merci beaucoup.* 私はメキシコの出身で、東京工業大学で学んでいます。慶應義塾大学で学んでいるわけではありませんが、この講演会に自由に参加できたことに感謝しています。専務理事は多くのアドバイスをし、若者を励ましてくださっています。私は、他のアドバイスについてお聞きしたいと思います。私たち若者が、政治、経済、科学技術、あるいは学問といったリスク回避を重視した多くの制度に囲まれていることをどう思いますか。変化を提案しようとしても、特に上の世代に関係していますが、リスク回避を重視したこういった制度に挑むことになります。私たちはどのように立ち向かうべきでしょうか。よろしくお願いします。

柏木教授： たくさん質問がきましたね。

ラガード氏： 本当に。それも、優れた質問ですね。

若年層の失業に関する質問はとても重要ですが、私は必ずしも解決策を持っていません。解決策には、協調が必要になるでしょう。誰か一人が

解決策を持っていて、全世界で歓迎されるというような問題ではないのです。

この問題に関する私の見方についてお話ししましょう。世界の大半の国では、若年層の失業率は平均的な年齢層の失業率の 2 倍です。すなわち、雇用市場や雇用市場へのアクセスは、経験豊かな他の年齢層に比べて、教育の有無にかかわらず若者にとって 2 倍ハードルが高いことを意味します。

誰もが思い浮かべる最初の解決策は、経済成長です。成長が緩慢だったり、全く成長しなかったり、成長率がマイナスになったら、失業問題は一段と悪化します。ところが、経済が成長すれば、この格差の問題を改善することはなくとも、全体的な失業者数を改善することになります。

最初のオプションは成長ですが、どんな成長でもいいというわけではありません。G20 は、強固で持続可能かつ均衡ある成長が必要だとしています。そしてリバランスが進んでおり、希望があります。全てが悲観的なものではありません。現在進んでいるリバランスングについてお話すると、現在の中国の経常収支の黒字は経済危機前と比較して 7 ポイント低下していますが、これはリバランスのよい例です。この傾向が、危機の最中もその後にも続くことを期待していますし、これはとても歓迎すべき動きであり、経済全体にとり良い傾向です。

2 番目の解決策は、インターンシップ・トレーニングや職業訓練などを通して、雇用市場のニーズに合わせスキルを調整することです。私は、この件を巡る日本の状況について答えられるほど日本経済にはあまり詳しくないのですが、大学などで受ける訓練や学生が習得する知識と、雇用市場で期待されるスキルとの間には著しいギャップがあります。解決策は協調することでのみ実現可能だと思う理由は、ここに 있습니다。

現在こうした例はあまりないと思いますが、私が大学生の頃は、企業や就職関係者の大学への関与は極めて不快なものとして、反対され、時には拒絶されました。このことに対して、抗議行動が行われました。実際、私たちは通りに出て、教育や大学での訓練は雇用市場と完全に切り離されているべきだと主張したものでした。

そうした時代は去りました。完全雇用が存在し、日本を含めた先進国では、30 年間にわたって経済が拡大していた時代なので可能だったのでしょう。かつてのようなことはもうないでしょう。潜在能力を発揮し、価値を生み出し、社会の一員となるためには、雇用市場へのアクセスが必要であることは誰もが理解しています。したがって、トレーニングと雇用市場のニーズの間によく見られるギャップを埋める必要があるのです。

日本では、このケースはあまり当てはまらないかもしれませんが。統計的にみると、日本の失業率は約 4.5%で、若年層はその 2 倍ですが、それ

でも大半の欧州の国々と比べ、約半分であり、たとえばスペインの失業率の約4分の1です。

それでも、この事実は慰めにはなりません。日本の若者はスペインの若者と比べて運がよいという意味ではなく、埋めるべきギャップや対処すべき問題が少ないことを意味しているだけです。成長、そして企業や公共サービスのニーズに対応するために、これらと教育制度との協調的なアプローチを組み合わせることで、ギャップを埋めることが出来ると私は思います。

同じように有益な別の要因は、人口的な要因です。それ自体が理想的か否かはわかりませんが、少なくとも高齢化が進んでいる国々では、退職した人々の席は若年層や女性に譲られるのではないのでしょうか。

私にとっての最大の障害は何だったのかと考えれば、それは私自身だったと言えます。20歳の時、世界を受け入れ、成し遂げられると思えることを達成するには、自信を持つことが必要です。そして、自信とは与えられるものではなく、また、生まれながらに身につけているわけではありません。自信は長い時間をかけて醸成されるものであり、両親、教師、同僚、手本となる人たち、そして あなたにはこれができる、あなたには素質がある、全ては予定通りにいかないかもしれない、全てを同時に成し遂げることはできないかもしれない、けれども、大丈夫だと言ってくれる人たち

によってもたらされるものです。

そう考えると、私が若い頃の最大の障害は、私自身でした。私はそれほど自信に満ちた人間ではありませんでしたが、私の人生を通じてとても幸運だったことは、私の周囲の人達、非常に謙虚な人々や楽観的な人々が、私に自信を与えてくれました。彼らは、自らの目標を達成する能力に自信を持っている人たちでした。

ですから、皆さんは愛を注ぎ、自信を与えてくれる人たちに決して背中を向けないでください。そういう人たちは時には厳しく、時には多くを求めたりするでしょう。それは結局のところ、優れた教授や教師のように、皆さんの成功を願い、自信を与えようと思うからこそ言うのです。

その気持ちゆえの言動を歓迎し、受け入れ、そして強くなってください。

次に、リスクを避ける環境で、どのように変革を提案したらよいでしょうか、というのが、あなたの質問の趣旨ですね。

万全の解決策というものがあるのかわかりませんが、リスクを回避する環境では、人々と衝突しますし、不安感あるいは不確実な状況に突き当たります。不安に駆られる人々に対処する最善の方法は、変革を提言しつつも、人々が自信を持ち続けられるように脅すようなことはしないことです。

変化を起こすことは、最も難しいことのひとつです。私がベーカー&マッケンジーのチェアマンだった時に、自らこれを経験しました。私は、おそらく皆さんが考える中で最も困難なことを成し遂げました。それは、大掛かりなことではありませんでしたが、法律の世界においては、国際的なパートナーシップに大きな変更を提案することや、世界各地の法体系を変えることは、人々を安全地帯の外へ連れ出すような問題です。

そして、弁護士を安全地帯の外に連れ出すと、実に複雑なことになります。弁護士というのは、職業柄危険を回避するからです。それが彼らの仕事であり、クライアントに絶えずリスクを警告しなければなりません。弁護士は必ずしも解決策の提供を依頼されるわけではありませんが、リスクに関して警告しなければなりません。したがって、彼ら自身が危険を回避する存在なのです。

変革を遂行するには、脅す必要はありません。変革に影響を受ける人々が変革後の未来を考え、大丈夫だと確信することができるよう、変革プロセスが終了した場合の状況がどのようになるのかを説明しなければなりません。状況も、解決策も、国における政策ミックスもそれぞれ異なるかもしれませんが、影響を受ける人々は大丈夫だと伝える必要があります。

したがって、変革を提言するときは、皆さん自身が変革の推進者だと考えないでください。変革に到達するための難しいプロセスや道のりにつ

いて考えるのではなく、リスクを回避している人々の不安について考え、
変革のプロセスを経るとどのようになるのかについて情報を与え、安心さ
せることが必要なのではないのでしょうか。

柏木教授： わかりました。残念ですが、残り時間はわずかです。あ
と一つだけ質問を受け付けます。私も質問がありますので。

ラガルド氏： わかりました。

柏木教授： それでは、そこの男性。

ラガルド氏： あなたが最後の質問者ですので、プレッシャーがあり
ますね。

質問者： どうもありがとうございます。慶応義塾大学で国際金融を
専攻している（聞き取り不能）と申します。ギリシャが競争力を回復する
ために、ギリシャ自らは何をすべきでしょうか。

ラガルド氏： ギリシャが競争力を回復するには、何をすべきか、で
すか。

質問者： そうです。よろしくお願いします。

ラガルド氏： 大変だわ。（笑い）

柏木教授： 最後にとっても重要な質問が出ました。それでは、私も司
会者の特権を使い一つ質問したいと思います。ラガルドさんは、若い頃
シンクロナイズド・スイミングのナショナルチームに属していたと聞いた

ことがあります。その経験は、今どのように役に立っていますか。特にシンクロナイズド・スイミング、もっと一般的に言えば、若いときにスポーツに打ち込んだメリットは何でしょうか。

ラガルド氏： わかりました。それでは、ギリシャ関係の質問に簡単に触れます。

IMF がギリシャに推奨しているのは、効率性を改善するための構造改革の実施です。これは、財政再建にも関連した基本的なことからスタートします。効率性は、製品・サービス市場だけの問題ではなく、ギリシャの歳入を徴収するためのものでもあります。昨日のことですが、ギリシャの財務大臣は、同国の歳入徴収で効率性が明らかに欠如していたことを認め、この点をさらに効率化することを目標のひとつに掲げたのは興味深いことです。

同様に、障壁を取り払い、製品・サービス市場を一層開放し、規制により若年層や新規採用者の参入が阻まれている特定の職業の縄張りや領域を撤廃します。こうした政策は、ギリシャが競争力を高めるうえでギリシャ自身のためになります。

それでは、スポーツについて。私は、どんなスポーツでも、そして、皆さんの頭脳が体の調子に耳を傾けるようにするべきと先ほど述べた点でもあります。重要だと思います。古代のラテンやギリシャの理念を引用

すると、*mens sana in corpora sano*、すなわち体が健康ならば、頭脳が冴えるということです。体と頭脳は密接に関連しています。そのために、水泳であれ、ランニング、ピラティス、サイクリング、バドミントン、サッカーでも何でも、私たち一人ひとりのためになると私は考えます。

私は、シンクロナイズド・スイミングをすることができて幸運でした。この競技もチームワークが基本です。チームワークはスポーツをするうえでの規律であり、チームとしての喜びです。何時間も練習するとき、水泳でプールを何往復も泳ぐとき、他のスイマーや友人と一緒にいけば、もっと楽しく、快適にできるでしょう。

私は幸運にもナショナルチームに在籍でき、そのことが私の誇りとなりました。国際大会でフランスの代表として選ばれたことは、自分がどこに属しているのかという意識を与えてくれました。

国同士で競うレベルでの練習をする必要はないでしょう。毎日の練習や大学でトレーニングを受けるチャンスがあれば、それは同じように重要なことで、心身のバランスをとるのに役立ちます。

柏木教授： 専務理事の職は、シンクロナイズド・スイミングより難しいですか。（笑い）

ラガルド氏： そうですね。両方とも息を凝らさなければなりません。

柏木教授： どうもありがとうございました。素晴らしい講演会でした。

た。(拍手)

* * * * *